資料紹介

ホイアン市貿易陶磁博物館所蔵の肥前磁器

齋藤潤花

はじめに

クァンナム省ホイアン市は、ベトナム中部の大都市ダナンから約三十キロメートル南に位置する。大航海時代、ヨーロッパの商人たちがアジアにおいても活発な交易活動を行うようになるとともに、十六世紀末ころからは生糸や香料を求める日本や中国の商人たちもホイアンを訪れるようになり、十七世紀初めころには中国人町や日本人町が成立する。

ホイアン旧市街地には、今も十九世紀初頭以降の木造町家群が残されており、一九八五年、ベトナム政府はこの町並みを国の重要文化財地区に指定、一九九九年にはユネスコの世界遺産にも登録された。ホイアン市貿易陶磁博物館はホイアン旧市街地チャンフー通り八〇番にあり、考古資料を収蔵するとともに、発掘成果を市民や観光客に伝える施設である。博物館ではホイアンで実施された発掘調査で出土した遺物の他、日本側調査団が収集した資料も併せて展示している。これら収集資料は、ホイアン近郊をはじめとするベトナム中部の農村から骨董市場に流出したものである。

本稿ではこれら収集資料のうち、十七世紀の日本とベトナムの交流を解明する上で重要な資料となる肥前磁器について紹介する。

資料紹介

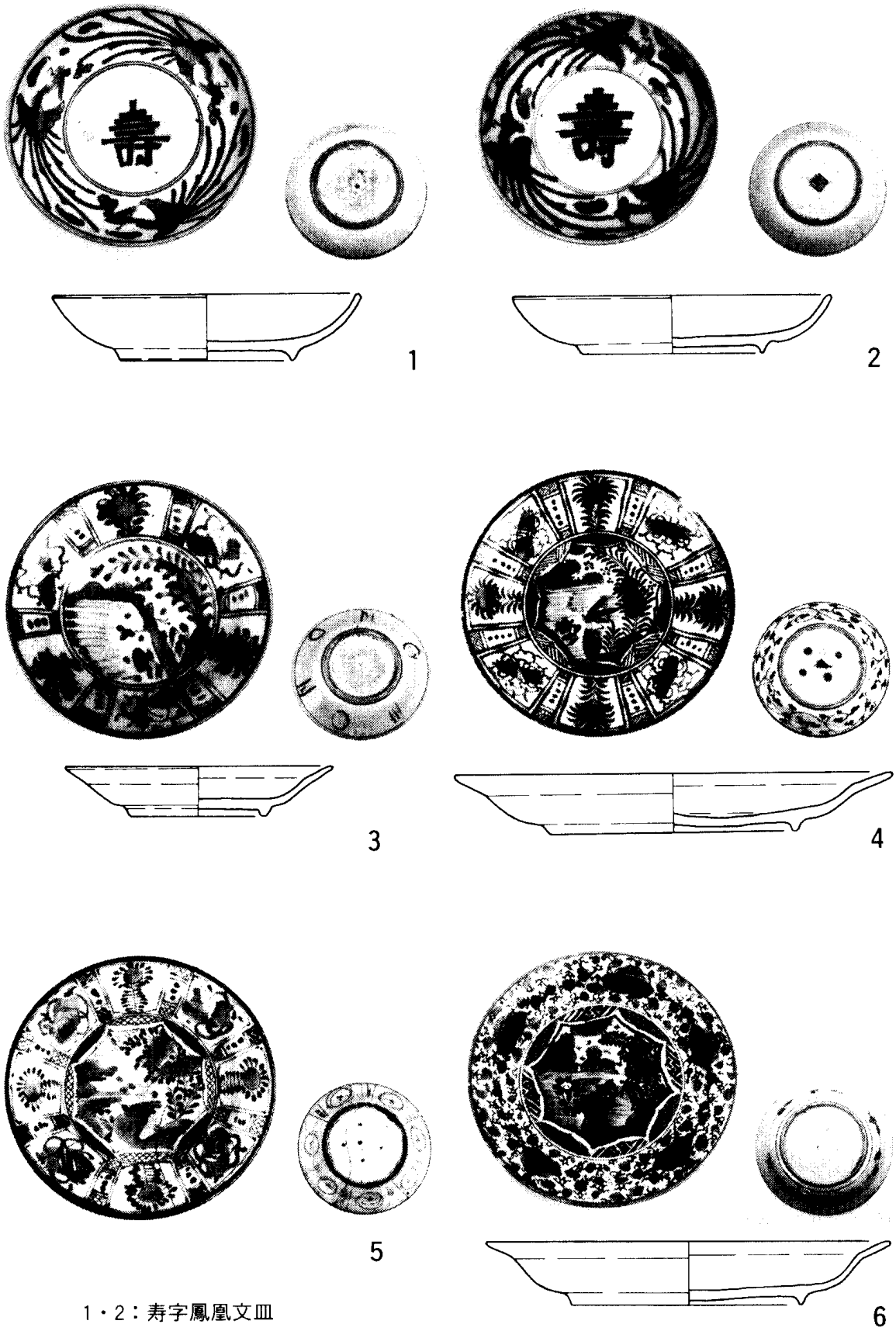
ここに紹介する肥前磁器は、九九七年夏にホイアン市において収集した資料十点で、全て染付のものである（図・・）。

1、2は体部内側に鳳凰文を三方向に配し、見込に「壽」字を描くいわゆる「寿字鳳凰文皿」である。日本では有田において長吉谷窯跡や柿右衛門窯跡などから陶片が出土しており、製作年代は一六五〇年代から一六六〇年代ころとされる。

1の法量は口径一六・三センチメートル（以下センチと略す）、器高三・〇センチ、底径九・五センチ。高台内にハリ支えの跡が一箇所ある。全体に呉須の発色は濃く明るいが、一部オリーブ色を呈する。2の法量は口径一五・八センチ、器高三・四センチ、底径八・九センチ。高台内に銘があるが内容は不明。ハリ支えの跡が一箇所ある。1、2共に外側口縁直下に圏線が廻る。

3から6はいわゆる「芙蓉手」の折縁皿である。「芙蓉手」とは、中国において明末の万暦年間（一五七三～一六一九）に成立した、皿の内側面を放射状に区画して花文や宝文を描き、見込に蓮池水禽文や花籠文などを描く意匠のものである。日本では有田において一六五〇年代ころから外尾山窯や猿川窯、長吉谷窯などで生産が始まったとされる。

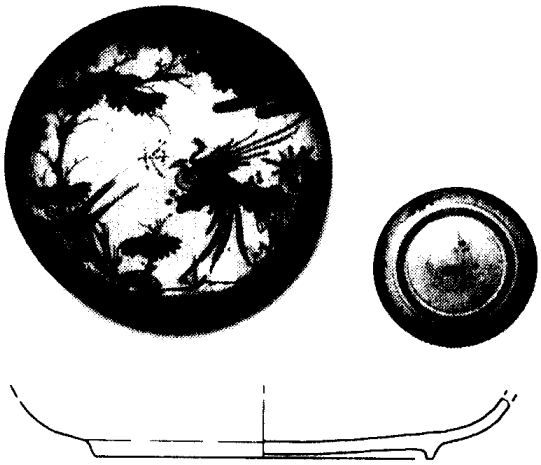
3の法量は口径一三・六センチ、器高二・六センチ、底径六・九セ



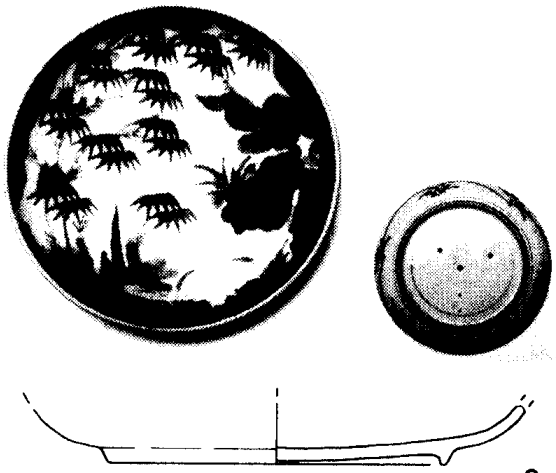
1・2：寿字鳳凰文皿

3～6：芙蓉手皿

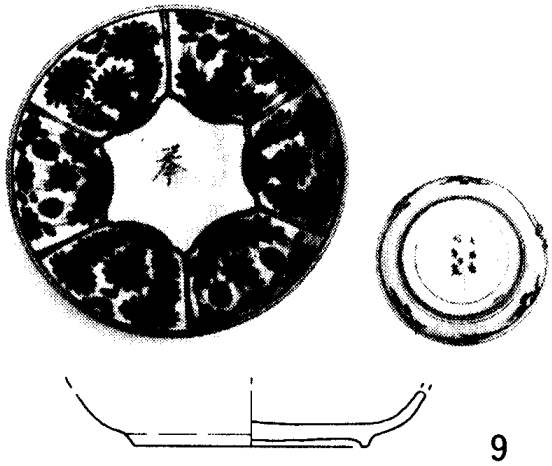
図１　ホイアン貿易陶磁博物館所蔵肥前磁器（図：S＝1/4）



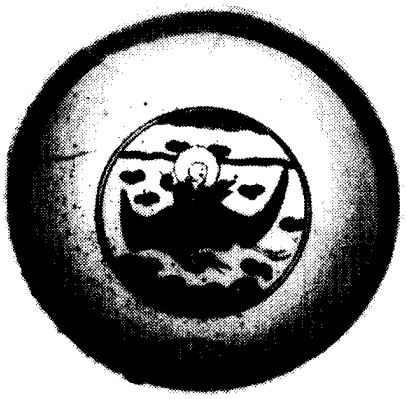
7

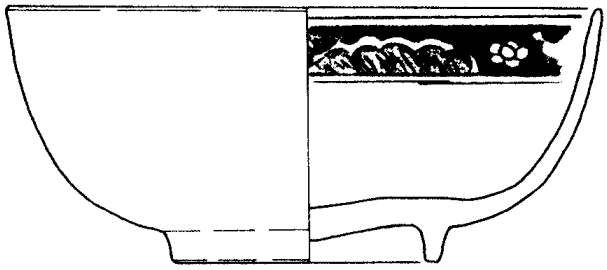


8

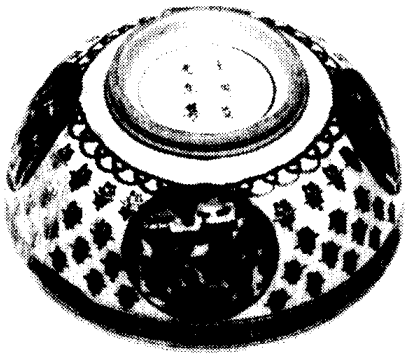


9





10



7・8：コンニャク印判皿

9　：花卉文皿

10　：鶴仙人文鉢

図2　ホイアン貿易陶磁博物館所蔵肥前磁器（図：S=1/4）

ンチ。見込は花虫文。体部外側は三本線で三方割し、円を描く。高台内にハリ支えの跡が一箇所ある。製作年代は一六七〇年代から一六九〇年代。

4は輪花の折縁皿である。法量は口径一一・四センチ、器高一・一センチ、底径一一・七センチ。見込は花虫文で体部外側は花唐草文。高台内に「へ」銘があり、五箇所に円錐状のハリ支えが落とされずに熔着したまま残っている。製作年代は一六八〇年代から一六九〇年代。

5の意匠は4とほぼ同じである。ただし、体部外側の文様が4とは異なり、縦線で七方に区画しその間に円文を描く。高台内にハリ支えの跡が五箇所ある。呉須の発色は薄くやや滲む。口唇部と高台をのちに薄い金属板で覆い加工している。製作年代は一六七〇年代から一六九〇年代。

6の法量は口径一〇・七センチ、器高一・三センチ、底径一一・九センチ。体部内側は牡丹唐草文で見込は花虫文。体部外側は三方に折枝文。高台内にハリ支えの跡が三箇所ある。製作年代は一六八〇年代から一七〇〇年代。

7から9は欠失した口縁部を加工した皿である。

7の底径は一一・二センチ、器高は残存値で一・〇センチ。見込は岩笹に鳥文で、笹の描写にはいわゆるコンニャク印判が用いられ、鳥などは手描きである。体部外側は唐草文。高台内には円圏線が描かれ、三箇所にハリ支えの跡がある。見込にはのちに工具で「本」字が彫られ、口唇部には薄い金属板が被せられている。製作年代は十七世紀末から十八世紀前半代ころである。

8の底径は一一・四センチ、器高の残存値は一・五センチである。見込は岩笹文で、笹の描写はコンニャク印判、岩や筍、雲などは手描きである。体部外側は唐草文。高台内は円圏線が描かれ、四箇所にハリ支えの跡がある。見込にはのちに工具によって「不」字が彫られている。製作年代は十七世紀末から十八世紀前半代。

7、8の施文に用いられた「コンニャク印判」とは、肥前磁器にみられる印刷技術の一種である。一六九〇年代以降の製品に多く見られるようになるもので、大量生産を目指した技法である。

9の底径は九・三センチ、器高の残存値が一・二センチ。見込中心は空白で、体部内側は区割して二種類の花卉文を交互に配置する。体部外側は唐草文。高台内は円圏線内に「大明成化年製」銘、一箇所にハリ支えの跡がある。見込にはのちに工具で「奉」字が彫られる。製作年代は一六九〇年代から一七〇〇年代。

10は鉢で、口径一一・五センチ、器高九・五センチ、底径六・九センチ。内側口縁には花波涛文帯、見込には鶴仙人文。外側は口縁に牡丹唐草文帯、体部は「寿」字で地を埋め、円圏線の窓内に人物文が描かれる。窓は四方にあるが人物の図柄はすべて同じである。高台内は円圏線内に「大明成化年製」銘。見込の鶴仙人、外側口縁帯の牡丹唐草文の唐草部、窓内人物の描写には型紙摺りと手描きが併用される。製作年代は十七世紀代末ころ。口縁の一部を欠失し、補

修されている。

肥前磁器における「型紙摺り」は、一六九〇年代ころに作られた製品に多く見られる。文様を切り抜いた型紙を器面にのせ、その上から刷毛で呉須など顔料を刷り込む印刷技術で、前述したコンニャク印判と同様、大量生産を目指した技法である。

おわりに

紹介した資料は、ベトナム中部の農村地帯から収集されたものである。これらがベトナム中部地域に存在することの背景や示唆することを考え、まとめとしたい。

清の建国にともなう混乱期に中国の磁器輸出が途絶えると、肥前磁器はその代替品としての役割を求められ、中国製品の模倣品が生産・輸出されるようになる。これは、肥前磁器資料がまとまって出土したホイアン市内のディン・カム・フォー地点の発掘調査からも層位的に裏付けられている。ここに紹介した芙蓉手皿や寿字鳳凰文皿などの資料も、このような背景の中、ベトナム中部に運ばれた品物だったのだろうと思われる。

「コンニャク印判」や「型紙摺り」の技法による製品はいずれも江戸などの消費地遺跡から出土することが多い一方、ホイアンでの発掘調査やベトナム各地での踏査・表採でもその存在は確認されていない。インドネシアなどに輸出されたケンディという水差にコンニャク印判が用いられた例（栗田美術館所蔵）を一点挙げるのみで、他のアジア各国、ヨーロッパからの出土や伝世の報告例はない。専ら国内向けの製品に用いられた技術で、輸出用としては一般的でなかったとされる所以である。ところが、このような資料が中部ベトナムに伝世していたということは、ベトナムをはじめ東南アジアにおける肥前磁器製品の流通や消費に関して新たな問題提起をし、多面的な見方が必要とされているようにも思える。今後の調査の進展、資料の増加を期待したい。

主要参考文献

有田町史編纂委員会一九八九「有田町史―古窯編」有田町

大橋康二一九九二「東南アジアに輸出された肥前陶磁」『海を渡った肥前のやきもの展』九州陶磁文化館

大橋康二一九九三「肥前陶磁」ニュー・サイエンス社

友田博通ほか一九九七「国際文化研究所紀要Vol.3 1996」国際文化研究所

菊池誠一・阿部百里子ほか一九九八「国際文化研究所紀要Vol.4 1997」国際文化研究所

付記

大橋康二先生、菊池誠一先生、阿部百里子氏には多くのご指導・ご教示を賜りました。また、文献検索については白木原宜氏の助力を得ました。厚く御礼申しあげます。